

2024 年度日本比較文学会秋季九州大会

日時：2024年12月7日(土) 13:00～17:00

開催方法：対面・オンライン併用（パスコードと ID は別途お知らせいたします）

研究発表会場：熊本大学黒髪北地区、文法棟2階 共用会議室

シンポジウム：14:30-16:20

「越境するハーン——日本・中国・フランス」

講師 秦 裕緯（西北師範大学）

郭 瀟穎（青島大学）

濱田 明（熊本大学）

コメンテーター 坂元 昌樹（熊本大学）

司会 西槇 偉（熊本大学）

シンポジウム

「越境するハーン——日本・中国・フランス」

日本文化のよき理解者として知られるラフカディオ・ハーン（1850～1904）は、来日前にアメリカで再話作品『中国怪談集』や、ゴッティエ『クレオパトラの一夜と幻想的な物語』の翻訳を刊行しました。中国・フランスもハーン研究にとって重要な視点といえるでしょう。

今年は没後 120 周年にあたり、かつて教鞭をとった第五高等学校の後身である熊本大学で、多言語多文化を生きたハーンについてシンポジウムを開催いたします。

「ハーン作品の越境性について——昆虫のイメージを手掛かりに」

秦 裕緯

本稿は、ラフカディオ・ハーン来日前後の作品における昆虫のイメージに焦点を当て、各創作時期の哲学・宗教・思想的要素を参考にしつつ、ハーン作品における越境性を検討する試みである。

ハーンは多文化を生きた作家であり、「越境」の視点からその創作についての先行研究は数多い。ハーンは、新聞記事・小説・訳詩・エッセイ等、多様なジャンルにわたる執筆を行った。また、取り入れられた地域の文化的背景によって、作品の内容が大きく変わる。し

かし、昆虫をモチーフにした作品は、創作時期を問わず、ハーン作品の中で複数見受けられる。昆虫の繁殖生態及び社会構造は人間に共通すると主張され、種族、死生の境界線を越えて捉えられ、科学観と宗教観の調和などハーン作品の一貫した課題と結びつけられている。各創作時期をめぐって昆虫イメージの変容を考察することで、ハーン作品における越境性の理解を深めることができだろう。

「織女の伝説」成立考——『太上感應篇』原典の版本調査を中心に」

郭 瀟穎

本稿は、ラフカディオ・ハーンの『太上感應篇』の実際の出典を明らかにしようとするものである。ハーンは、スタニスラス・アイニャン・ジュリアン（1797-1873）が翻訳した『太上感應篇』に言及しているが、使用した翻訳の原典はこれまでに特定されていない。そこで、本論文では、ジャン・ピエール・アベル・レミュザ（1788-1832）とジュリアンによって翻訳された『太上感應篇』の本文を検討することによって原典の版を明らかにし、『織女の伝説』の正確な伝播経路を初めて解明する。また、ハーンがオリジナルの結末を破棄したことも重要な変更点といえる。その理由について、ハーンは道教思想を理解していなかったか、あるいは興味も持たなかったということを論証する。

「ハーンにとってのフランス文学」

濱田 明

ハーンはフランス文学をどのように読み、書き、語ったのか。ハーンの初めての出版はゴーティエ『クレオパトラの一夜と幻想的な物語』の翻訳であった。ニューオーリンズの『タイムズ・デモクラット』紙の文芸部長就任後は、モーパッサン、ロティなどの翻訳と文芸評論を数多く執筆する。来日後のハーンは、英語教師の傍ら日本についての文章を英語圏の読者に向けて執筆していたが、熊本時代のチェンバレンとの書簡などからフランス文学に対する関心を継続的に持ち続けていたことが窺える。アメリカ時代の文芸評論、チェンバレンとの書簡を検討しつつ、東京帝国大学での講義でハーンがどのようにフランス文学を語ったかを紹介したい。